

「迎賓館赤坂離宮」終了報告

2019年 7月2日(火) 実施 JGA 第一支部運営委員会

今回はJGA初の「迎賓館赤坂離宮」研修であり、合計28名参加し、内閣府の特別なお計らいにより実現した大変貴重な研修となりました。今回講師役をご担当くださったのは迎賓館参観専門職の山本講師とJGA会員でボランティア説明員の原誠一郎講師です。

原講師のお話によると年々インバウンドのお客様が増えている中で、今回初の通訳案内士による研修の効果として、参観者の更なる増加に繋がることを内閣府としても期待しているとのこと。

迎賓館赤坂離宮は、1909年紀州徳川家の江戸中屋敷があった赤坂の地に建てられたネオバロック様式の壮麗な宮殿で、明治天皇時代の皇太子であられた大正天皇の「東宮御所」として建設されたのが始まりです。建設にあたり総指揮をとったのが建築家・片山東熊です。彼は当時日本における西洋建築の第一人者であり、まさに文明開化にふさわしい国を挙げての一大プロジェクトでした。最初に案内されたのは赤坂離宮正面玄関前庭ですがあらためて赤坂離宮を見渡すと、開国からわずか50年でこれだけのものを建てた当時の日本人の偉業に驚かされます。でも驚きはここからが本番でした。



次に案内されたのは「和風別館」でここからは迎賓館の山本氏の解説です。和風別館の手前には高さ10m程の大きなイングリッシュオークの木があり、これは1975年エリザベス女王が国賓として滞在されたときに植樹されたとのこと。入り口には125匹にも及ぶ美しい色の鯉、そして樹齢150年になるという立派な盆栽があり、参加者からはおもわずため息がもれておりました。

その後、山本氏の解説は建物内部へと続きます。広間、床、天井、茶室、茶器など大変格式高いものを拝見させていただき驚きの連続でした。最後はふたたび原講師の解説で赤坂離宮内部の見学です。公用4室及び大ホールを順路に沿って説明がありました。「朝日の間」では参加者から感嘆の声があがりました。フランス18世紀末様式を取り入れながら豪華絢爛の中にも「和」のテイストがさりげなく演出されて、なんとも贅沢な……ということばしか出てきません。すべての展示物は一切触ることが禁止されていたのですが、唯一この「朝日の間」にある京都西陣の「金華山織」の嘗て使用されていたものが展示されており参加者は惜しむようにその感触を楽しみました。参加者はみな、夢心地のまま帰路についた一日でした。